

B・F・ホズリッツ編

『後進地域の発展』

“The Progress of Underdeveloped Areas.” Edited by Bert F. Hoselitz. Chicago: The University of Chicago Press, 1952. 283 pp. \$4.75.

深澤 八郎

(一) 本書は、一九五一年に行われたシカゴ大学のハリス基金に

よる国際問題に関する第二七回学会の報告を、同大学社会科学教授ホズリッツが編集したものである。含まれる報告は総数十六、夫々の専門分野を異にする学者が相い異なる見地から、後進国の経済発展に関する広範な問題を取扱っている点で興味深く教えられることが多い。しかしその点はまた当然に本書の如く小冊に余りにも多くの問題を盛りすぎて、個々の報告が極めて概括的・表面的叙述に止まらざるを得ず、また本書全体としての統一を欠き印象を稀薄なものにせざるを得ない結果を導いている。(これは、本書に含まれる諸報告が元来各専門分野における新しい研究報告としてよりもむしろ多分に啓蒙的意図をもつてなされている——ハリス基金による年次学会の性格が国際問題に関する啓蒙的意図を多分にもつものである——ということにも因るだろう。従つて

書評 B・F・ホズリッツ編 後進地域の発展

本書は各専門学者の緊密な共同による総合的研究の成果として読まれるのではなく、むしろその前段階として各分野からの問題提起・相互理解のために共同討論の場をつくるものとして、あるいは単なる啓蒙書として読まれるべきものであろう。

しかし、後進国の経済発展について、いかに考えるべきかという問題に関して、本書はその広い視野と多面的な扱い方とをもつて、問題接近の緒を示唆してくれる点で専門家にとつても興味深い。以下この点を中心に若干の「感想」を述べて見たい。

(二) まず編者ホズリッツの見解を見よう。後進国の経済発展に関する一般的・理論的シエーマを構成する一つの方法として、先進西欧諸国の経済・社会史に見られる発展に関する一般的命題を先例として採り、この後進国への適用可能性(その条件)を検討することが考えられる。この可能性の問題は、経済発展の基底をなす人間諸集団の社会的・文化的構造の全般的検討を必要条件とする。この条件を充すための手段として、彼は経済・社会史的認識のほかに文化人類学・社会学のそれを必要とし、これらの共同研究によらねばならないとする。(社会学・人類学的研究の必要性は、後進国における社会組織・制度は「原始的」「primitive」なものに近く、経済発展過程は文化人類学の対象とする「文化的特質」「culture trait」によつて規制されることが非常に多い

という理由による。) さらに彼によれば、このような言わば歴史・社会学的な立場からする後進国の経済発展に関する一般的シエーマは、それが現実的に後進国経済開発政策と結びつき、これに有力な影響を与えるためには、後進国開発に関する現在の国内的・国際的政策(とくに経済政策)の動向分析によつて補足されねばならないし、これなしには発展に関する適確な見通しはえられないとする。

(四) かかる編者の見解の当否に関しては暫く措くとして、とに角本書の構成は編者の見解に応ずる如く三つの部分に分たれる。すなわち第一部は「経済発展に関する歴史の見解」、第二部は「経済発展の文化的側面」、および第三部「経済政策の諸問題」となっている。しかしこれら三部は十六人の専門家達の小報告から成り、各部門でもちろん、各部内においてさえも報告者相互間に緊密な連関があるわけではなく、各人の専門分野から見た後進国の経済発展に関する諸問題を提起し合うに止まつている。編者の意図は歴史的観点からする統一的シエーマの樹立にあるように見られるが、実際には本書の中心はむしろ経済発展における後進国の社会・文化的条件の重要性を指摘した第二部に見られ、しかもこの文化人類学者および社会学者の分析のうちに考えさせられる点が多い。次に各部の内容について見よう。

第一部では欧米の社会・経済史に見られる先例から現在の後進国における経済発展と工業化過程の全般的コース、それを担うエリート、新技術導入における移民の役割、国家の役割について歴史的展望を与えている。何れも重要な問題であるが、ここでは、「後進国」がいかなる歴史的発展の段階あるいはタイプに属するのか何らの規定もなく(先進欧米諸国についても同じく、ゲルシエンクロンを除いて何ら規定していない)、各人が恣意的に歴史的先例を挙げるに止まるから、その展望もまた「参考までに」止まつている。編者ホズリノツの歴史的視点からのパースペクティブを強力なものとするためには、先進欧米諸国については勿論のこと、後進国についても「原始的」に近いものと片付けないで社会・経済的に発展のタイプを或る程度明確に区別すべきであろう。このことは後進国について歴史的研究所資料の極めて乏しい現状として困難ではあるが不可能ではない。とくに後進国のうちでも東南アジア諸国あるいは中南米諸国については相当立入つてまで可能なことである。(先進欧米諸国の経済・社会史に関しては言うまでもないことであるが、後進国についても歴史的視野をもつ米国の学者を挙げるのに困難はないであらう。さらに今次大戦後の米国における後進諸国に関する地域研究の著しい抬頭に想い至る時、編者ホズリノツの比較経済・社会史的意図を一層強く実現することは可能であるしまた当然なすべきであらう。言わば、

「ドイツ的な」歴史学派あるいはM・ウェーバーの如きタイプ規定を要求しえないとしても、本書における恣意的に選ばれた歴史的先蹤の列挙だけでは説得力をもちえない。社会・経済史的に広汎に発展の差をもつ後進諸国を全体的に取扱う場合、いかに「類型」的考察を避ける傾向をもつ英米史学といえども若干のタイプを考えずには考察を進めえないのではなからうか。

第二部「経済発展の文化的側面」においては、R・リントン、M・J・ハースコビッツ、マリオン・J・レヴィー、M・E・オブラーなどの文化人類学・社会学の精鋭を動員して、経済発展（とくに工業化過程・新技術導入過程を中心として）に伴う後進国の「原始的」な社会制度・組織・心理の制約作用を「文化変化」“culture change”, “social change”, or “acculturation”の見地から多面的・包括的に素描している。後進国の経済発展を考える場合に、われわれはそこにおける社会・経済構造の余りにも近代欧米的なものから距りのある事実に当面して、かかる社会での欧米的な経済理論の妥当性に対して疑問を抱かざるをえないし、またかかる社会における経済活動を規制する経済外的^{II}社会的諸条件をいかに把握・評価すべきかに苦慮せざるをえない。かかる「原始的」社会の学問的認識のための有力な手段として、社会・政治・経済・宗教の全生活の「統合された」“integrated”「文化複合体」“culture complex”として扱えようとする

る文化人類学（あるいは社会人類学）がとくに英独仏などにおいて早くから著しい発展を見せ、さらに最近はその動機理論として「文化変化」論にまで進んでいることはここにとりたてて言うまでもないであろう。本書の第二部に見られる諸報告は、米国におけるこの文化人類学の多年の成果を援用して後進国の経済発展過程に起る文化変化の諸問題（逆に言えば文化変化の過程がその一部としての経済生活分野に対して経済外的諸条件としていかに作用するか）を豊かな例証を引きつつ概括している。従つてこの部分は本書の中で最も興味深くまた充実した内容をもつていえると言えよう。報告者夫々の立場から経済発展に対する経済外的諸要因の制約的作用を広汎に網羅的に指摘・強調している点で、立場を異にする経済学徒にとつても興味深いものがある。しかしこゝで報告者各個の立場および内容について紹介批判する余裕をもたないからそれらに共通する若干の疑点を指摘するに止める。まず直ちに目につくことはここに引かれてある例証についてである。米国の文化人類学が対象を従来南北米大陸の「原始民族」に集中してきたことからここにあげられる例証も殆んどこれらの原始的な氏族・部族諸集団の調査成果に限られている。しかし後進国と言う場合、その中にはかかる原始民族だけでなく「文化」的に一層複雑な言わば「封建的」な社会・経済体制をもつ民族あるいは国家が含まれ、しかもこのような民族・国家の経済発展が現在の問

題として一層重要であることが多い。アメリカ・インディアンやアフリカ諸民族よりは、ラテン・アメリカ諸国や東南アジア諸国の問題の方が現在の後進国の問題として焦点に近い。前者からの例証とそれを基礎とする文化変化論が、後者の場合にどの程度妥当性を主張しうるかという点に大きな疑問がある。

文化人類学・文化変化論の方法として「文化複合体」とその動態過程を捉えようとする言わば「総合的・包括的」な方法は、原始民族の場合には有力な武器であろうが「封建的」体制（さらにこの上に欧米植民活動の結果として植民地支配体制と資本主義的経済機構とを附着せしめられたような言わば、「封建的・植民地的」な社会・経済体制）をもつ後進諸国における諸問題を「文化複合体」として適確に把握できるであろうか。このような場合には米国の文化人類学あるいは社会学の方法は、封建的社会における権力支配関係・階級構造の分析を大きく取り入れる必要があるのではなからうか。（社会生活の単位集団としての家族・氏族・部族その他機能的集団の構造・機能・相互関係に考察を集中するに止まるべきではないであらう。本書におけるマリオン・J・レヴィーの態度も、パーソンズ、M・ウェーバーの流れを汲むにもかかわらずやはりかかる感じを免れない。このことはもつと極言すれば、米国の社会学・文化人類学・文化変化論における歴史的視野の欠如と言えないだらうか。）

「文化複合体」として対象を総合的・包括的に把握・理解しようとする文化人類学者の研究態度と本書の如き概説書における報告に対して、問題接近への「焦点」を要求することは妥当でないかもしれないが、本書のこの部分における報告は何れも余りに多くの内容を盛りすぎて問題の並列に終っている憾がある。文化人類学・文化変化論の立場からする発言を強固なものとして提起するためには、むしろ重要な個別問題を経済発展過程に相応させつつ特殊地域の研究に限定して示すことが望ましいのではなからうか（その好例として Wilbert E. Moore: "Industrialization and Labor, *Social Aspects of Economic Development*", Cornell University Press, 1951. を挙げよう）。

この部分全体として当然に、経済発展過程における経済外的諸条件の発展制約的作用を非常に強調する結果となり、経済発展の前途を暗く見ている。この点同感を禁じえないものがあるとはいえ、発展の可能性を積極的に見出す努力がなさるべきであらう。たんに社会的制約条件を指摘・強調し、この条件に順応する漸進的政策を採るべきことを提言する消極的助言に止まるならば後進国の経済発展は一層困難となり長期に亘らざるをえない。（文化人類学が元来植民政策への補助学として成長し重視されてきた事実には周知のとおりであるが、それによつて提起・採用された植民地統治における間接統治政策は一面で植民地政治・経済開発に無

用の摩擦を避けさせたが、他面では原住民の文言維持・経済発展の遲滞を結果したことに注意すべきであろう。後進的諸国における旧い社会・経済体制との摩擦を無用に増大することはさげねばならないがそれに拘泥して経済発展過程を遅らせることは、少くとも今後の後進国の発展過程を考える場合には大きな注意を要するであろう。

最後に、本書におけるこの部分のもつ意義について若干の疑問がある。編者ホズリッツは先にも述べた如く比較社会・経済史の見地から後進国の経済発展について展望を与えようとした如くであるが、もし彼の意図がそこにあるとするならば、欧米諸国の社会・経済史と共に後進諸国のそれを言わば「パターン」として追求対比すべきではなかつたかということである。ここに第二部として文化人類学・文化変化論をもつてきたことは決して歴史的視野を貫くことにならないし、それを補う方便としても適切ではない。ここに文化人類学・社会学的見地からの分析を入れた動機は、後進国における経済発展が「文化」的諸条件によつて規制されるのが非常に大きい事実、さらに現実の政策への助言を期待したことにあつたと見られよう。（さらに彼の意図から見て後進国における歴史の欠如＝原始的文化段階を予想したとも考えられるが、むしろこの点はさほど重視しえないであろう。）彼の意図の如くに歴史的視野を貫くために補助的方便としてこの部分の報告

を生かそうとするならば、文化人類学・文化変化論の方法をもつてなされた叙述は「類型」構成を考えることによつて社会・経済史の中に位置づけられねばならないのではなからうか。

さらに次の第三部「経済政策の諸問題」における経済学的考察とこの第二部の報告を連絡するためには、一方では文化人類学者が経済発展過程に起る経済の分野での個別的な重要問題（例えばムーアの前掲書に見られる如く労働のモビリティの問題）を中心に文化変化論的研究を深化してゆくと共に、他方では経済学者達が文化人類学者の積み上げた成果をデーターとして経済理論的モデルの中に与件を逐次導入しうるように整序してゆく努力が必要であらう。しかし本書においては歴史・人類学・経済学三者の間にこのような努力は殆んどなされていない。本書では三者の個別的視点から夫々の問題が提起され、漸く相互の問題点とその所在が明らかにされたという程度を出ない。（従来文化人類学・文化変化論の分野での後進国研究の資料はたんに米国のみでなく英・仏・蘭・独の諸学者によつてとくに南北米大陸以外の地域について優れた成果が数多く発表されているから、これらが充分に利用されるならば方法・内容ともにより一層豊かな成果を期待しうるであらう。）

第三部「経済政策の諸問題」では、J・ヴァイナー、H・S・ブロッホ、アルバート・O・ヒルシュマンなどによつて、米国の

後進国援助政策・経済発展計画における財政の役割、後進国工業化の先進国経済への影響等の諸問題がとりあげられているが、何れも現在では常識化した見解にすぎず、本書の中では問題の重要性に比して甚だ粗略な部分をなしている。この部分で一応注目すべき報告はヴァイナーのものであるが、彼の見解は後に出した著書に一層充分に展開されているからここには言及しない（Jacob Viner: "International Trade and Economic Development", Oxford, 1953. 参照）。

後進国の経済発展に対する経済学者の関心はとくに戦後米国において顕著であるが、なお、国連関係の経済専門家達の間でも非常な関心をよんでいることはすでに周知の事実である。（例えば、"American Economic Review" May, 1952. には後進国の経済発展に関する注目すべき論文として R・ヌルクセ、J・H・アドラー、J・S・デューセンベリーなどのそれが見られ、また国連の後進国開発理論としては United Nations: Measures for the Economic Development of Underdeveloped Countries, 1951. があり、さらにこれに関する批判として同じく "American Economic Review", May, 1954. の諸論文が注目されよう。）その他にもなお M・ドップ、H・W・シンガー、V・K・R・V・ラオ、S・H・フランケルなどの諸論文をあげうる。これらは何れも後進国の国内経済の発展に関する経済理論的分析であるが、これ以

外に工業化の見地あるいは世界貿易の観点から後進国経済発展の問題をとりあげた研究を数えるならば恐らく相当数になるであろう。しかしこれらの諸研究は、国際貿易の見地からのそれは一応措くとして、大体において近代経済理論のモデルを中心としてそれに若干の後進国の社会・経済の現象的・機能的特徴のみを変数としてとり入れて考察を進める程度に止め、後進国の社会・経済体制の構造的分析には敢えて立ち入らうとしない。近代経済学的な理論の純粋性あるいは可測性を強調することもよいであろうが、後進国の経済発展のパス・スベクトイブはそのような理論的考察によつては適確に把握できないことにわれわれは注目せねばならぬであろう。経済外的諸条件の考察はそれ自体として経済学とは全く別個に進めればよいと考えるならば、後進国経済発展に関する経済学的分析の発言権は極めて局限されたものに止まらざるをえないであろう。この発言権を有力なものとするためには、近代経済理論のモデルを若干のいわば社会的「変数」の導入により修正する程度の現在の研究段階に止まることを許されない。しかしそれが容易に実現し難い課題であることも勿論である。

本書によつて、もしもかかる課題の解決に何らかの暗示をえようとなれば、それはやはり第二部に示された文化人類学・文化変遷論的考察をデーターとしてそれらを経済学としての立場から組織してみることはないだろうか。（その場合に近代経済学的

理論のモデルの中に後進国の社会・経済的特徴を機能的な側面のみ注目して「変数」として採り入れることは比較的容易にできることであり、すでに前掲の米国、国連その他の経済学者が若干試みている。しかし、このような取扱い方についてもなお展開の余地が多いと考えられる。さらに近代経済学的新見方とは別に社会・経済史的な視野をとり入れつつ経済理論的に後進国経済の諸問題にメスを入れようとするならば、前述の如き文化人類学・文化変化論の諸成果は「類型」的なものに再編されねばならない。また後進国の社会・経済史的研究の成果をとり入れねばならないこととなり、問題の処理は一層困難なものとならう。

何れの方をえらぶにせよ、なお今後の展開を期待せねばならない未開拓の分野が広範に残されていることを痛感せざるをえない。

(四) 以上、本書について若干の「感想」的私見を述べたが筆者は本書に対して些か主観的にすぎる超越的酷評を敢えてした憾みを禁じえない。しかし筆者自身が本書を通じて個々の問題あるいは全体的な把握の仕方について教えられ、また示唆をうけることが多かった次第であるから、以上の如き本書に対する酷評にも拘らず筆者は本書に負うところが大きいと言わねばならない。従つて筆者は本書に対して誹謗する意図を些かも持つものではない。

〔最後に本書の綱者ホズリツの意図に沿い、また筆者が本文に指摘した如き方向において、その後シカゴ大学においても多面的な研究が展開され、その成果は“*Economic Development and Cultural Change*”誌に発表されていることを付記しておく。〕

また本書の如くアメリカ文化人類学者直による後進国の経済発展に関する共同研究の一成果として、コーネル大学を中心とする劣作“*Human Problems in Technical Change, A Casebook*”, edited by Edward H. Spicer. 1952. (New York: Russell Sage Foundation.)が注目され、さらに後進国経済発展の社会的条件、歴史的視点からの分析として“*American Economic Review*”, May, 1951 所収の諸論文があるが、これらは何れも本書と併せ読まれる場合に興味深くまた示唆的であらう。〕